

日本の名作名文ハイライト

# 舞姫

森鷗外

朗読 日高徹郎

出所 朗読 **【名作をよむ】TED** の声

<http://www.voiceblog.jp/ted606/>

teabreak 編

## 舞姫 森鷗外

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱灯の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜毎にここに集い来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。

五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとく幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもえば、稚き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさえ珍しげにしるししを、心ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買いし冊子もまだ白紙のままなるは、ドイツにて物学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養い得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなお心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきゆうしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言うも更なり、われとわが心さえ変り易きをも悟り得たり。きのうのこれはきよの非なるわが瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、フリンヂイシイの港を出でてより、早や二十日あまりを経ぬ。世の常

ならば生面の客にさえ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言うことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩ましたればなり。この恨は初め一抹の雲のごとく我心を略めて、スイスの山色をも見せず、イタリアの古跡にも心を留めさせず、中頃は世を厭い、身をはかなみて、腸日ごとに九回すともいうべき惨痛をわれに負わせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の影とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響のごとく、限なき懐旧の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてかこの恨を消せむ。もし外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すが／＼しくもなりなむ。これのみは余りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじと思えど、今宵はあたりに人もなし、房奴の来て電気線の鍵を振るにはなお程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

余は幼き比より厳しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪いつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でて予備黄に通いしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎という名はいつも一級の首にしろされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言われ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎え、楽しき年を送ること三とせばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもう心の勇

み立ちて、五十を踰えし母に別るるをもさまで悲しとは思わず、遙々と家を離れてベルリンの都に来ぬ。

余は模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこのヨーロッパの新都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するときは、幽静なる境なるべく思われるれど、この大道髪のごときウンテル、デン、リンデンに来て両辺なる石だたみの人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩そびえたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める※に倚り玉ふ頃なりければ、様々の色に飾り成したる礼装をなしたる、妍き少女のパリまねびの粧したる、彼もこれも目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろ／＼の馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる処には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交わしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多の景物目睫の間に集まりたれば、始めてここに来しものの応接に違なきも宜なり。されど我胸には縦ひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲う外物を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おほやけの紹介状を出だして東來の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎え、公使館よりの手つづきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教えもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、わが故里にて、ドイツ、フランスの語を学びしことなり。彼らは始めて余を見

しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つると問わぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとに、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めむと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも済みて、取調も次第に捗り行けば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写し留めて、ついには幾巻をかなしけむ。大学のかたにては、稚き心に思い計りしがごとく、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、このか彼かと心迷いながらも、二三の法家の講筵に列るにおもい定めて、謝金を収め、往きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好きなおなるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に従い、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、すでに久しくこの自由なる大学の風に當りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やう／＼表にあらわれて、きのうまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜しからず、また善く法典を暗じて獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私に思うやう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらむはなお堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、極めて丁寧にいらいへしつる余が、

この頃より官長に寄する書には連りに法制の細目に※ふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言しつ。また大学にては法科の講筵を余所にして、歴史文学に心を寄せ、漸く蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のままに用いるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懷きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が當時の地位なりけり。されどこれのみにては、なお我地位を覆へすに足らざりけんを、日比ベルリンの留学生の中にて、ある勢力ある一群と余との間に、面白からぬ関係ありて、彼人々は余を猜疑し、またついに余を讒誣するに至りぬ。されどこれとてもその故なくてやは。

彼人々は余が俱に麦酒の杯をも挙げず、球突きの手をも取らぬを、かたくなる心と欲を制する力とに帰して、且は嘲り且は嫉みたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、この故よしは、我身だに知らざりしを、怎でか人に知らるべき。わが心はかの合歡という木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、学の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさえ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一条にたどりしのみ。余所に心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、ただ外物に恐れて自らわが手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有為の人物なることを疑わず、また我心の能く耐えんこと

をも深く信じたりき。嗚呼、彼も一時。舟の横浜を離るるまでは、天晴豪傑と  
思いし身も、せきあえぬ涙に手巾を濡らしつるを我れながら怪しと思ひしが、  
これぞなか／＼に我本性なりける。この心は生れながらにやありけん、また早  
く父を失いて母の手に育てられしによりてや生じけん。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふび  
んなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣を纏ひ、珈琲店に座して客を延く女を  
見ては、往きてこれに就かん勇氣なく、高き帽を頂き、眼鏡に鼻を挟ませて、  
普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物言う「レエベマン」を見ては、往きて  
これと遊ばん勇氣なし。この等の勇氣なければ、彼活発なる同郷の人々と交ら  
んようもなし。この交際の疎きがために、彼人々はただ余を嘲り、余を嫉むの  
みならず、また余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負いて、暫  
時の間に無量の艱難を閲し尽す媒なりける。

ある日の夕暮なりしが、余は獣苑を漫步して、ウンテル、デン、リンデンを  
過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に帰らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。  
余は彼の灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に干した  
る敷布、襦袢などまだ取入れぬ人家、頬髭長き猶太教徒の翁が戸前にたたずみ  
たる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は甕住まいの鍛冶が家に通じ  
たる貸家などに向いて、凹字の形に引籠みて立てられたる、この三百年前の遺  
跡を望む毎に、心の恍惚となりて暫したたずみしこと幾度なるを知らず。

今この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかえりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問いたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に援はれたるは、なぜに一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き嘆きに遭いて、前後を顧みる違なく、ここに立ちて泣くにや。我が憶病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えず側に倚り、「なぜに泣き玉ふか。ところに繫累なき外人は、却りて力を借し易きこともあらん。」  
といい掛けたるが、我ながらわが大胆なるに呆れたり。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が真率なる心や色に形はれたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼のごとくひどくはあらず。またた我母のごとく。」暫し枯れたる涙の泉はまた溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救い玉へ。君。わが耻なき人とならんを。母はわが彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らではかなはぬに、家に一銭の貯だになし。」

跡は歎歎の声のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注がれたり。